現代若者たちの結婚事情

――第11回出生動向調査・独身者調査の結果から――

高橋　重郷*1　金子　隆一*4　佐藤　龍三郎*6　池ノ上　正子*2
三田　房美*5　佐々井　司*3　岩澤　美帆*3　新谷　由里子*7

Ⅰ　は　じ　め　に

わが国では年々少子化が深刻の度を増している。1997年の合計特殊出生率は最低記録を更新して1.39に至っており，1998年もほぼ同等の趨勢である[1]。少子化の直接の原因はこれまでのところ晩婚化，未婚化というかたちで進行する若者たちの結婚離れである。すなわち，若い世代ほど結婚を先送りする傾向が続いており，このため従来の出産最盛期に当たる年齢層で結婚している者の割合が著しく低下した結果，出生率が低下している。一旦結婚した人々の出生行動は比較的安定しており，最近になって若い世代でやや出生ペースの低下が見られるものの[2]，少なくともこれまでのところは若者の結婚離れが少子化を引き起こしてきたと言って差し支えない。しかし，それではなぜ若者たちはこれほどまでに結婚から遠ざかるようになったのか。この問題の答えは，家族のあり方やジェンダーの問題から企業の雇用慣行等に至るまで広範な分野に存在し，いわば社会全般のあり方に関わるとの認識が必要である[3]。

国立社会保障・人口問題研究所は，近年の結婚動向の背景にある若者の意識や環境の変化を探るために，出生動向基本調査において1982年(第8回調査)以降独身者を対象とした調査を行ってきた。平成9（1997）年6月に実施された第11回調査は，独身者調査としては4回目に当たり，少子化に関連して，若者の結婚をめぐる諸相について興味深い実態を明らかにしている。本稿ではこの独身者調査の結果から，主要な結果について紹介したい[4]。

なお，本報告の対象は独身者調査において全国から抽出された18歳以上35歳未満の未婚男子(3,982人)，および女子（3,612人）である。

表1　未婚男女の生涯の結婚についての考え

(単位　%)

生涯の結婚について	男子				女子			
	第8回(1982年)	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)	第8回(1982年)	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
いずれ結婚するつもり	95.9	91.8	90.0	85.9	94.2	92.9	90.2	89.1
総数	—	100.0	100.0	100.0	—	100.0	100.0	100.0
ある程度の年齢までには結婚するつもり	—	60.4	52.8	48.6	—	54.1	49.2	42.9
理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない	—	37.5	45.5	50.1	—	44.5	49.6	56.1
不詳	—	2.1	1.6	1.3	—	1.3	1.3	1.1
一生結婚するつもりはない	2.3	4.5	4.9	6.3	4.1	4.6	5.2	4.9
不詳	1.8	3.7	5.1	7.8	1.7	2.5	4.6	6.0
標本数	2 732	3 299	4 215	3 982	2 110	2 605	3 647	3 612

＊1国立社会保障・人口問題研究所人口動向研究部長　＊2同主任研究員　＊3同研究員
＊4同総合企画部第四室長　＊5同主任研究員　＊6同国際関係部第一室長　＊7同研究所客員研究員

II 若者たちの結婚離れを探る

わが国では従来生涯のうちで結婚することを当然とする意識が支配的であった。過去数回の調査結果によれば，いずれは結婚しようと考える者がいぜん未婚者の大部分を占めているものの，その割合は近年わずかずつ減少する傾向がみられる(表1)。今回調査では男女とも初めて90%を下回った。とくに男子での減少が目につく。詳しくみると必ずしも生涯を独身で過ごすつもりの者が急増しているわけではないが，態度不詳の者が増えており，生涯のうちで必ず結婚しようとする態度は，少なくとも一部では揺らいできているようである。

また，生涯に一度は結婚したいと思っている場合でも，ある程度の年齢までに結婚したいと考える者は調査ごとに減少し，逆に理想の相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわないと考える者が増えている(表1)。若者の間で「適齢期」意識がしだいに薄らぎ，代わって結婚の中身，とりわけ結婚相手に対するこだわりが強くなったことをうかがわせる。つまり，生涯の結婚意思をもつグループは構成比を縮小しているだけでなく，内容的にも規範に従う従来型から個人的希望としての結婚意思をもつタイプに置き換わりつつあるといえる。

次に，結婚に対する態度を結婚に近い方から段階別となるよう分類して，その構成を調べたものを表2に示した。これはまず全体を「一年以内に結婚したい」，「理想の相手が見つかれば(一年以内に)結婚してもよい」，「まだ結婚するつもりはない」，「一生結婚するつもりはない」に四区分し，さらに第二，三のグループについては，「ある程度の年齢までには結婚するつもり」(結婚年齢重視派)と「理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」(理想相手追求派)に細分したものである。表2はこれを年齢階級別に示してあるが，年齢が高まるにしたがって結婚から遠い意識段階のグループが

表2 年齢別にみた未婚者の結婚の意識段階別構成，および結婚からの意識距離

(単位 %) 【男子】

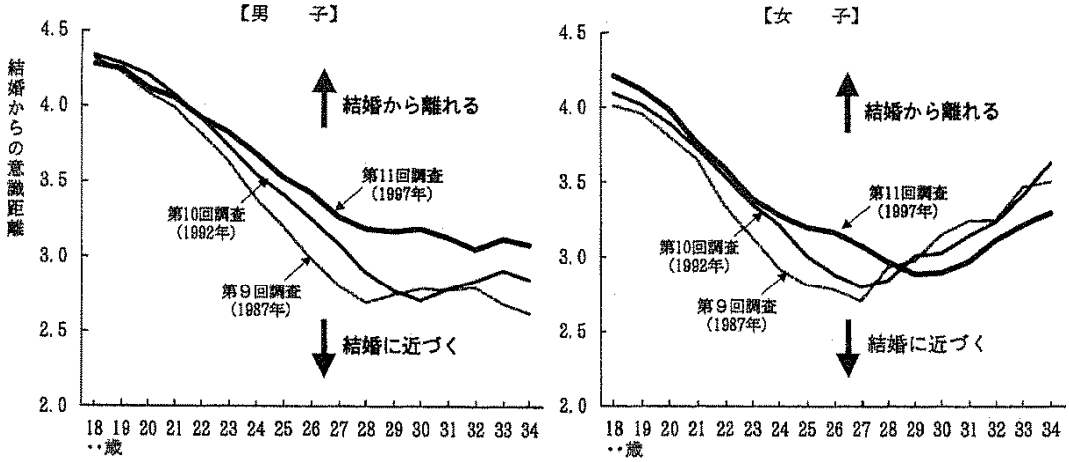
	総数(標本数)	一年以内に結婚したい(距離=1)	理想の相手なら(一年以内に)結婚してもよい		まだ結婚するつもりはない		一生結婚するつもりはない(=6)	不詳	結婚からの意識距離(平均値)	(参考)結婚からの意識距離(平均値)	
			結婚年齢重視派(=2)	理想相手重視派(=3)	結婚年齢重視派(=4)	理想相手重視派(=5)				第10回調査	第9回調査
総数(18~34歳)	100.0(3 982)	7.8	12.0	16.1	24.2	24.0	6.3	9.5	3.70	3.68	3.54
18~19歳	100.0 (621)	1.3	5.6	9.0	34.0	34.5	7.2	8.4	4.27	4.34	4.28
20~24	100.0(1 683)	5.1	9.9	11.7	30.4	28.0	5.5	9.4	3.91	3.92	3.82
25~29	100.0(1 149)	13.0	15.8	19.8	18.6	18.5	5.5	9.0	3.33	3.13	2.89
30~34	100.0 (529)	12.5	18.0	30.8	5.5	11.3	9.6	12.3	3.16	2.81	2.77

(単位 %) 【女子】

	総数(標本数)	一年以内に結婚したい(距離=1)	理想の相手なら(一年以内に)結婚してもよい		まだ結婚するつもりはない		一生結婚するつもりはない(=6)	不詳	結婚からの意識距離(平均値)	(参考)結婚からの意識距離(平均値)	
			結婚年齢重視派(=2)	理想相手重視派(=3)	結婚年齢重視派(=4)	理想相手重視派(=5)				第10回調査	第9回調査
総数(18~34歳)	100.0(3 612)	9.1	13.3	22.9	18.7	23.5	4.9	7.5	3.53	3.54	3.45
18~19歳	100.0(606)	1.8	7.3	10.1	30.5	36.6	6.1	7.6	4.20	4.06	3.97
20~24	100.0(1 754)	8.0	14.2	18.7	22.8	25.8	4.1	6.4	3.60	3.59	3.44
25~29	100.0(908)	14.2	16.4	31.4	8.8	14.5	5.4	9.3	3.10	2.88	2.78
30~34	100.0(344)	14.2	11.0	44.8	3.5	12.5	5.5	8.4	3.06	3.26	3.29

注 結婚意識に関する三つの設問に対する回答から，未婚者中の結婚意識の各段階の構成比を年齢階級別に示したもの。平均値(結婚からの意識距離)は，不詳を除いて算出。
結婚年齢重視派および理想相手追求派とは，それぞれ「ある程度の年齢までには結婚するつもり」，「理想的な相手が見つかるまでは結婚しなくてもかまわない」と回答したグループ。

図1　各回調査による年齢別にみた未婚者の結婚からの意識距離



注　結婚からの意識距離とは結婚意思の段階を得点化してグループ別に平均したもの（本文および表2参照）。グラフは平滑化のため当該年齢を中心とした前後3歳の意識距離の移動平均を描いたもの。ただし，各回調査18歳，および第9回調査34歳では当該年齢を2倍の加重とした隣接年齢値との加重平均を，第10回，11回調査34歳は33～35歳の平均を用いている。標本数：第9回調査（男子3,098件，女子2,494件），第10回調査（3,902，3,419），第11回調査（3,604，3,341）

相対的に減り，近い段階のグループが増えるようすがわかる。ここで各段階グループに対して結婚に近い順に1～6の数値を与えてこれを年齢階級ごとに平均すると，各年齢グループの結婚からの意識的隔たりの指標（結婚からの意識距離）が得られる。表2で見ると年齢とともに「意識距離」はしだいに減少している。また，以前の調査結果と比較すると，男子25歳以上，女子30～34歳以外では「意識距離」はやや増加している。

表3　調査別，年齢別にみた希望する結婚年齢

（単位　歳）

現在年齢	男子			女子		
	第9回（1987年）	第10回（1992年）	第11回（1997年）	第9回（1987年）	第10回（1992年）	第11回（1997年）
総数(18～34歳)	27.9	28.4	28.8	25.1	26.0	26.9
18～19歳	26.2	26.7	26.3	23.6	24.2	24.8
20～24	26.9	27.3	27.5	24.7	25.2	25.8
25～29	29.0	29.6	29.9	27.8	28.5	28.7
30～34	33.5	33.7	34.2	32.6	33.3	33.5

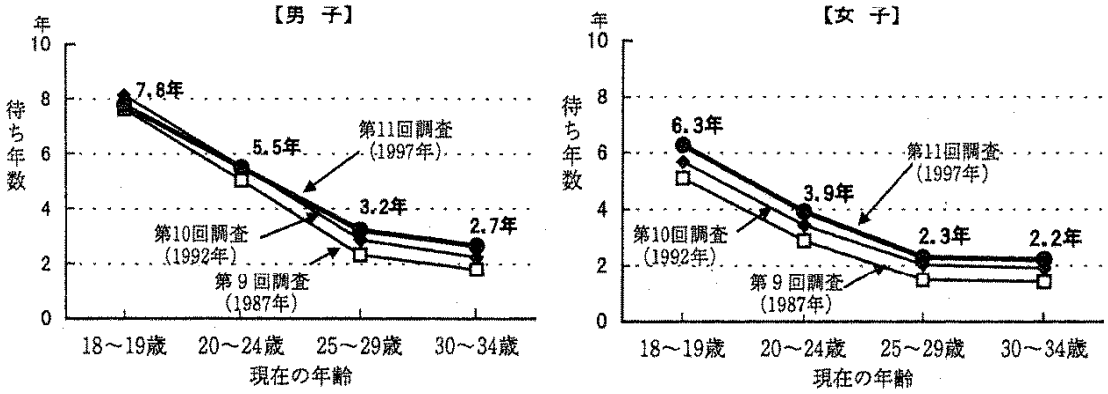
注　対象は「いずれ結婚するつもり」と答えた未婚者。

図1はこの結婚からの意識距離をより詳しく観察するために，調査別，年齢各歳別（3年移動平均）に図示したものである。男女とも20歳代の終わり頃までは，意識距離は直線的に減少して行くが，その後男子では30歳代半ばまで横這い，女子では反転して再び結婚から離れて行く。ここで注目すべきは，調査回を追うごとに各年齢における結婚からの意識距離が増加している点である。すなわち最近10年間では同じ年齢で比較した場合，未婚者の意識はしだいに結婚から離れる傾向にあることが示唆される。ただ，最近5年間に限ればその傾向は年齢層によって若干異なり，男子では20歳代半ば以降で，また女子では20歳代後半で結婚離れが顕著である。ただし，女子では20歳代終わり以降，すなわち意識距離が反転するあたりから以降では，逆に結婚へ近づく傾向が見られる。これは近年の晩婚化傾向によって，結婚意思をもちながらこの年齢層まで未婚に留まる女子が増えているためとみられる。つまり，結婚への意識の近づき方の年齢パターンは晩婚化の進行と並行して高年齢側（図では右側）へシフトしているものと見られる。男子でも前回調査までは同様の変化が認められるが，今回調査ではやや異なる傾向すなわち20歳代半ば以降で一貫して意識が結婚から離れる傾向が見られる。

次に未婚者が希望する結婚年齢によって，結婚離れの状況を調べよう。

未婚者の平均希望結婚年齢を年齢階層ごとに過去の調査と比較すると，男子18～19歳を除いたすべての年齢層で希望結婚年齢が上昇しており（表3），未婚者の希望自体が「晩婚化」していることが裏付けられる。この希望結婚年齢の

図2　希望する結婚年齢までの待ち年数



注　希望する結婚年齢までの待ち年数とは，対象者が希望する結婚年齢から現在の年齢を引いた年数。
図中の数字は第11回調査の結果。第9，10回の待ち年数は，男子18～19歳（7.6年，8.1年）女子（5.1年,5.7年），男子20～24歳（5.1年，5.6年）女子（2.9年，3.4年），男子25～29歳（2.3年，2.9年）女子（1.5年，2.0年），男子30～34歳（1.8年，2.2年）女子（1.4年，1.9年）。

表4　各回調査による未婚者の結婚の利点・独身の利点に対する考え

（単位　%）

	男子			女子		
	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)
今のあなたにとって結婚することは						
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
利点があると思う	69.1	66.7	64.6	70.8	71.4	69.9
利点はないと思う	25.4	29.1	30.3	24.7	25.2	25.5
不詳	5.5	4.2	5.1	4.5	3.4	4.6
今のあなたにとって独身生活は						
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
利点があると思う	83.0	83.6	82.7	89.7	89.0	88.5
利点はないと思う	10.7	11.2	11.6	5.4	7.4	7.2
不詳	6.3	5.2	5.7	4.9	3.6	4.3
標本数	3 299	4 215	3 982	2 605	3 647	3 612

注　設問「今のあなたにとって，結婚することは何か利点があると思いますか。」
1．利点があると思う，2．利点はないと思う
「それでは逆に今のあなたにとって，独身生活には結婚生活にはない利点があると思いますか。」
1．利点があると思う，2．利点はないと思う

上昇ペースは実際に生じている結婚年齢の上昇を上回っており，とくに女子でペースが速い。

この結婚先送りの意識をより明瞭に観察するために，図2では現在の年齢から希望する結婚年齢までの年数を「結婚までの待ち年数」として，年齢階級別に図示した。これによると当然ながら年齢が高くなるほど待ち年数が短くなるのでグラフは右下がりとなっているが，各調査回ごとに比較するとグラフが上方へシフトする傾向が見られる。これはすなわち，同年齢でも最近の調査ほど希望する待ち年数が長くなっていることを示すから，結婚を先送りしようとする意識が強くなっていることを捉えている。詳しくみると今回調査男子の18～19歳，20～24歳はやや傾向が異なるが，男子25歳以上，女子ではすべての年齢層で明瞭に結婚の先送り意識の進展が見られる。

さて，以上に見てきたような結婚の実現から遠ざかろうとする意識はなぜ強まっているのか。それに答えるためには，まず今日の若者たちが結婚にどのような価値を見いだしているのか，あるいは反対に現在の独身生活にどのような魅力を感じているのかについて知る必要が有るだろう。

本調査では，対象となる未婚男女に現時点で結婚することには「利点があると思う」か否か，および現在の独身生活には「利点があると思う」か否かをたずねている。表4に，それら利点の有無に関する回答結果を示した。今回調査において結婚することに「利点あり」と答えたのは男子64.6%，女子69.9%であった。10年前の第9回調査に比べると，男子では4.5ポイントの減少となっており，0.9ポイント減少の女子に比べて変化が大きい。また，年齢別にみると男子25歳以降，女子でも25～29歳の年齢層で結婚に利点なしとする者がとくに増加している（図3）。

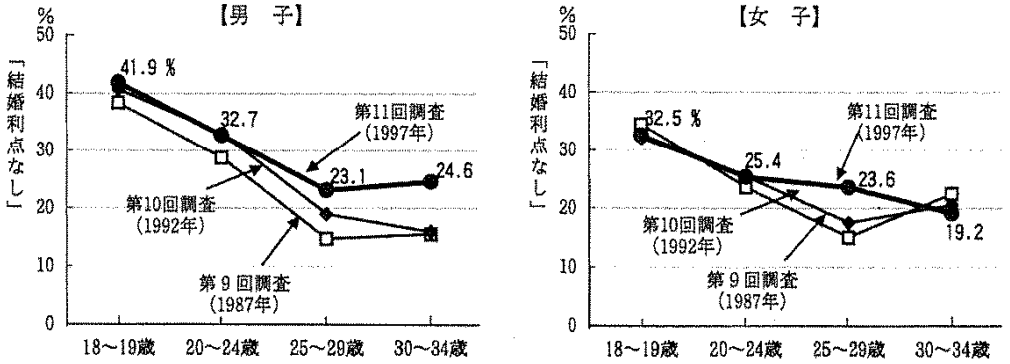
この「結婚に利点はない」とする者の年齢パターンは，前にみた結婚意欲の年齢変化と附合しており，またその調査間の変化パターンもよく一致している(図1，図2）。すなわち，結婚に利点を感じなくなった年齢層で意識が結婚から離れていると言える。

一方，独身生活の利点については，今回利点ありと答えたのは男子82.7%，女子88.5%で（表4下），これまでの調査と同様結婚の利点を大幅に上回る結果となっており，独身生活の魅力は結婚の魅力に比べてかなり強く意識されている。また，独身生活に利点を感じる割合は年齢や調査年次，さらには結婚意欲の段階などグループ別の変化が小さいことが特徴で，男子では常に8割前後，女子では概ね9割弱のレベルで安定している[5]。

さて，次に結婚のどのような利点が失われてきているのか見よう。

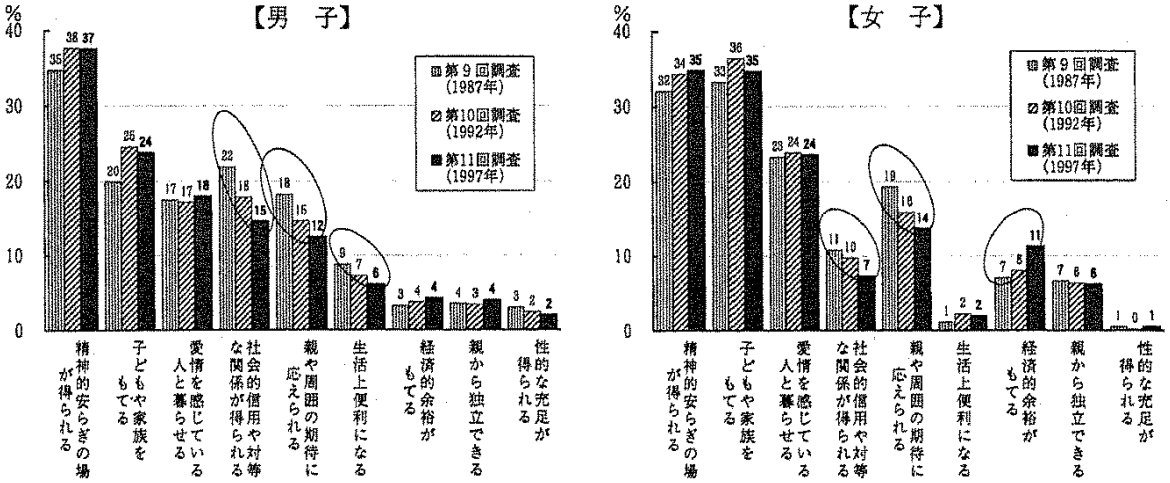
具体的な結婚の利点について選択された項目を見ると（図4），男女とも「精神的な安らぎの場が得られる」が最も多く，次いで「自分の子どもや家族をもてる」「愛情を感じている人と暮らせる」が続き，個人の心理面に関する事柄が第3位までを占めている。一方10年前に男子では2位であった「社会的信用を得たり，周囲と対等になれる」や「親を安心させたり周囲の期待にこたえられる」という社会生活上の利点は，男女とも調査ごとにポイントを落としている。また，男子では「生活上便利になる」も減少している。結局，男女とも未婚者が結婚に強く求めるのは安らぎ，愛情といった個人的，内面的な側面であり，社会的信用や親の期待に応える

図3　年齢別にみた今の自分にとって「結婚することは利点がない」と考える未婚者



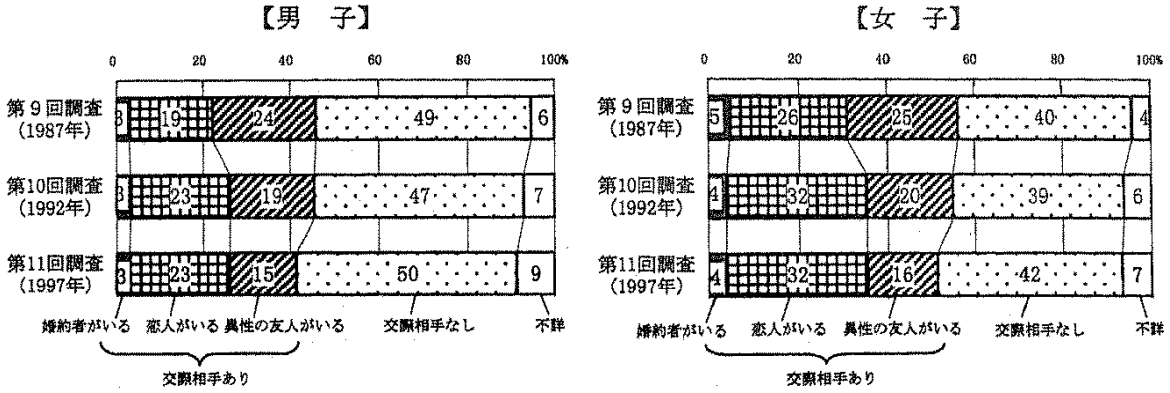
注　グラフ上の数値は第11回調査の結果。

図4　調査別にみた，結婚することの利点



注　未婚者のうち何%の者が，各項目を主要な結婚の利点（最大二つまで）として考えているかを示す。グラフ上の数字がそのパーセンテージを示す。変化が顕著な項目に，○印をつけた。

図5　調査別にみた未婚者の異性との交際



といった社会的側面や実生活上の利点など結婚の外面的機能を求める者は急速に減少している。

以上見てきたように，今回の調査からは若者たちの間で従来結婚の持っていた社会的あるいは実生活上のメリット感が薄らぎ，結婚の魅力が縮小した結果，いずれは結婚したいと思いつつも当面の結婚に対する意欲を持てないでいる姿が浮かぶ。結婚を先送りしようとする傾向は依然進行しており，今後も晩婚化はしばらく続くと考えられる。

表5　各回調査による年齢別の性経験ありの者の割合

(単位　%)

	男　子			女　子		
	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)
総　数	53.0	54.9	60.1	30.2	38.3	50.5
18～19歳	24.3	25.1	31.9	17.4	20.7	28.2
20～24	52.7	54.8	60.0	31.9	42.0	52.0
25～29	66.6	71.3	70.6	40.0	46.7	58.3
30～34	68.3	72.3	71.3	38.8	49.8	61.3
標本数	3 299	4 215	3 982	2 605	3 647	3 612

Ⅲ　異性との交際

前章では，若者たちが自ら結婚を先送りしている様子が明らかとなったが，最近の未婚化，晩婚化の別の原因として，しばしば結婚相手の得にくさが挙げられている。前者を能動的な原因とすれば，後者は受動的な原因と言えよう。結婚相手の問題を検証するために，ここでは独身者調査から異性との交際状況について調べてみよう。

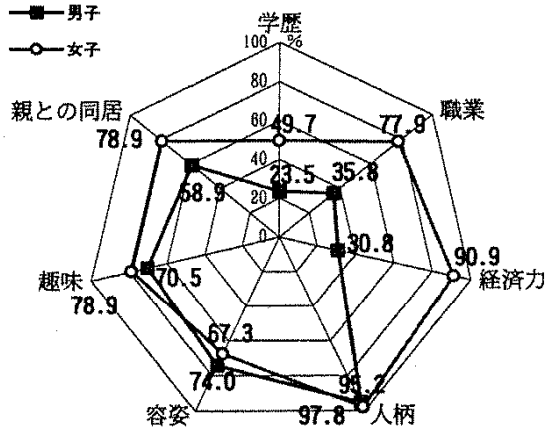
18～34歳の未婚者のうち調査時点で異性と交際している者の割合は従来から男子5割弱，女子5割強であり，たしかに欧米などに比べて活発な交際状況とは言えない。しかも今回調査では男女とも「交際相手（婚約者，恋人，友人として）をもつ」と回答した者が若年層を中心にさらに減少した(図5）。「異性の交際相手をもたない」と回答した男子は49.8%でほぼ半数，女子では41.9%であり，ともに前回調査より3ポイントほど増えている(同図)。青年層の異性交際は意外なほど低調なまま推移している[6]。

この状況は結婚動向とどう関わるか。調査では交際相手のいる男女に，その相手と結婚したいかどうかを尋ねているが，その結果を用いて未婚者全体の中で結婚したい交際相手のいるパーセンテージを調べると，男女ともかなり減少していることがわかる。すなわち，男子25～29歳では5年前の調査時点で30.2%の者が結婚したい相手と交際していたが，今回調査では26.0%に減少した。女子でも同じ年齢層で32.7%から30.7%へと減っている。交際状況の低調さは，確実に結婚候補者の減少につながっている。

異性関係の別の側面として同棲および性経験についても見ておこう。まず，近年欧米では同棲の一般化が結婚動向に大きく影響しているが，わが国の場合はどうであろうか。今回調査の結果では，現在同棲していると答えた者は男女とも1.7%で，過去に経験があると答えた者は男子

3.1%，女子3.0%であった。つまり現在，過去を合わせても未婚者の中で同棲を経験している者は5%未満であり（男子4.8%，女子4.6%），わが国の場合同棲が結婚動向に影響を及ぼしているとは考えられない。次に性経験については，未婚男子6割，未婚女子5割の者が経験ありと答えており，異性交際が低調であるのとはうらはらに，性経験を持つ者の割合は調査ごとに一貫して増加している（表5）。前回調査からの増加は，男子では5.2ポイント，女子では12.2ポイントと女子での増加傾向が顕著で，レベル自体は依然男子の経験率の方が高いものの，その差は急速に縮まっている。

図6　男女別にみた未婚者が重視する結婚相手の条件



説明　チャート外周上に配置した結婚相手の各条件について「重視する」または「考慮する」と答えた対象者の割合を示す。「容姿」を除いて，女子の方が男子よりも結婚相手の条件には常に関心が高い。

さて，未婚者は結婚相手にどのような条件を望んでいるのだろうか。図6に今回調査された未婚者の望む結婚相手の条件を図示した。図では7つの項目について男女別に重視する（または考慮する）と回答した割合が示されているが，男女ともに最もポイントが高いのは相手の「人柄」で，次いで男子は「容姿」，女子は「経済力」となっている。「容姿」以外の項目では，女子の方が男子に比べてすべてポイントが高く，とくに結婚相手の社会経済的条件については女子の方が関心が高いということがわかる。また，結婚相手の年齢については男子では本人の年齢に関係なく一定の年齢層の相手を希望し，女子では常に自分より平均して2－3年年上の男性を希望する傾向がある。ただ男女とも過去に比べると自分と近い年齢の結婚相手を希望する傾向が強まっており，このことは近年実際の夫婦でみられる年齢差の縮小傾向[7]とも符合している。

未婚者の望む結婚形態では，「恋愛結婚をしたい」と考える者が男子66.8%，女子73.4%であり，「見合結婚をしたい」（男子0.6%，女子0.5%），「どちらでもかまわない」（31.3%，25.1%）に比べて多く，また一貫して増えている。これも実際の恋愛結婚の割合の一貫した増加[8]と符号している。

表6　未婚女子の理想と予定のライフコース

（単位　%）

	理想のライフコース			予定のライフコース			(参考)既婚女性のライフコース
	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)	第9回(1987年)	第10回(1992年)	第11回(1997年)	第11回(1997年)
総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
非婚就業コース	3.7	3.3	4.4	7.1	9.5	9.3	—
DINKSコース	2.5	4.1	4.4	1.4	2.6	3.0	6.6
両立コース	18.5	19.3	27.2	15.3	14.7	15.5	16.8
再就職コース	31.1	29.7	34.3	42.2	45.8	42.9	24.6
専業主婦コース	33.6	32.5	20.6	23.9	19.2	17.7	31.6
その他・不詳	10.7	11.1	9.2	10.1	8.2	11.6	20.4
標本数	2 605	3 647	3 612	2 605	3 647	3 612	7 354

注　既婚女性のライフコースは，第11回出生動向調査（夫婦調査），結婚持続期間15～19年の妻に関する結果。
女性のライフコースとは，一人の女性が送る人生のタイプのことで，とくに仕事，結婚，子育ての組み合わせにおける主要な5つのタイプを以下のように設定した。本調査では，未婚女子には自身における理想・予定のライフコースを，未婚男子には女性に望むライフコースをたずねている。
非婚就業コース：結婚せず，仕事を一生続ける
ＤＩＮＫＳコース：結婚するが子どもは持たず，仕事を一生続ける
両立コース：結婚し子どもを持つが，仕事も一生続ける
再就職コース：結婚し子どもを持つが，結婚出産の時期にいったん退職し，子育て後に再び仕事を持つ
専業主婦コース：結婚して仕事を持ち，結婚あるいは出産の機会に退職し，その後は仕事を持たない

Ⅳ　求めるライフコース

さて，現代の若者は結婚後についてはどのような見通し，あるいは希望を持っているのであろうか。調査結果から探ってみたい。

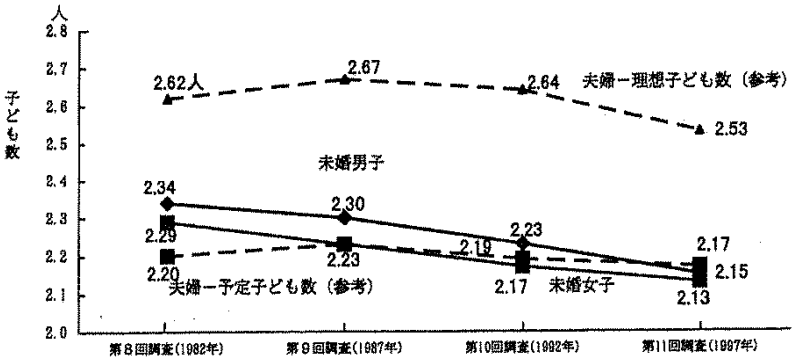
まず，結婚・出産と就業とに関連した女性のライフコースについて，未婚女子が理想と考えるコースを見ると，8割以上は結婚して子

どもを持つタイプであって，「非婚就業」や「DINKS（結婚して子どもを持たない）」を理想と考える者は少数である（表6左）。今回の結果で最も支持が集まっているのは「再就職コース」（34.3%）で，次いで仕事と子育ての「両立」（27.2%），「専業主婦」（20.6%）の順になっている。5年前までトップだった「専業主婦コース」が大幅に減り三位となった。また，仕事と家庭の「両立コース」も増加が著しく，この5年で「理想のライフコース」には大きな変化が見られた。女性の結婚後の就業に対する意欲は高まっていると見られる。

ただ，「実際になりそう」と考える予定のライフコースを見るとこれまでとあまり変化がなく，「再就職コース」に集中する傾向が強い（表6右）。この予定のライフコースを理想ライフコースとの関連で見ると，「両立コース」「専業主婦コース」を理想とする者のそれぞれ半数程度は「再就職コース」に「なりそう」としており，「再就職コース」は，就業を重視する者，家事・子育てを重視する者双方にとって妥協的な，それゆえ実現しやすいライフコースと考えられているようである。なお，未婚男子が女性に望むライフコースでは，女子の理想と同様に「専業主婦コース」が減り，「両立コース」が増えている。

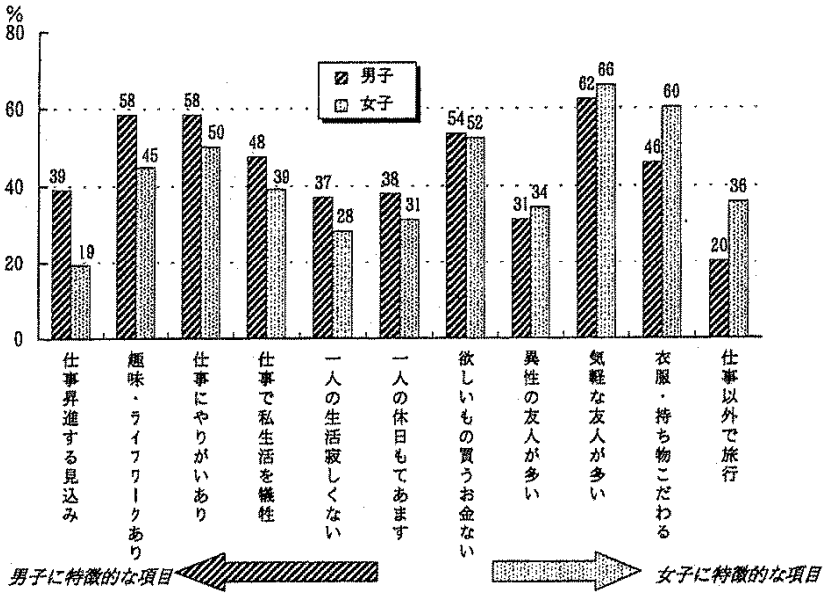
つぎに，結婚後に希望する子ども数はどうなっているだろうか。図7に過去の調査から未婚男女の平均希望子ども数の推移を示した（図には比較のため夫婦の平均理想・予定子ども数も示してある）。図を見ると，男女とも順次希望子ども数が減少してきていることがわかる。従来未婚者の平均希望子ども数は夫婦予定子ども数より多めであったが，最近ではわずかながら逆転してむしろ少なくなっている。未婚者の意識は結婚から離れているだけでなく，結婚後に望む子ども数も着実に減らしているようだ。なお，希望する子どもの性別構成を見ると，男女とも過去に比べて女児を望む傾向が強まっている。

図7　調査別にみた，平均希望・理想・予定子ども数



注　夫婦―理想子ども数・予定子ども数は，第11回出生動向調査（夫婦調査）より

図8　男女別，生活スタイル（「あてはまる」と答えた人の割合）



V　生活スタイルと結婚・家族観

本調査では独身者の結婚意識変化の背景を探るため，彼らの生活スタイルと結婚・家族に関する価値観を調べている。

図8に今回調査した生活スタイルの各項目に関する

男女の比較を示した。各グラフは，その下に示した項目が自分の生活スタイルにあてはまると回答したパーセンテージを高さで表しており，左から順に男子に特徴的な項目～女子に特徴的な項目となっている。図によれば，男子は仕事や趣味へのこだわりが女子を上回っており，反対に女子では旅行や持ち物などのこだわりで男子を上回っている。また交友関係(「異性に友人が多い」「気軽な友人が多い」）についても女子の方がやや積極的な結果となった。つまり未婚男子は仕事と趣味に，女子では旅行・持ち物と交友に重点を置いた生活スタイルをとっていると言える。

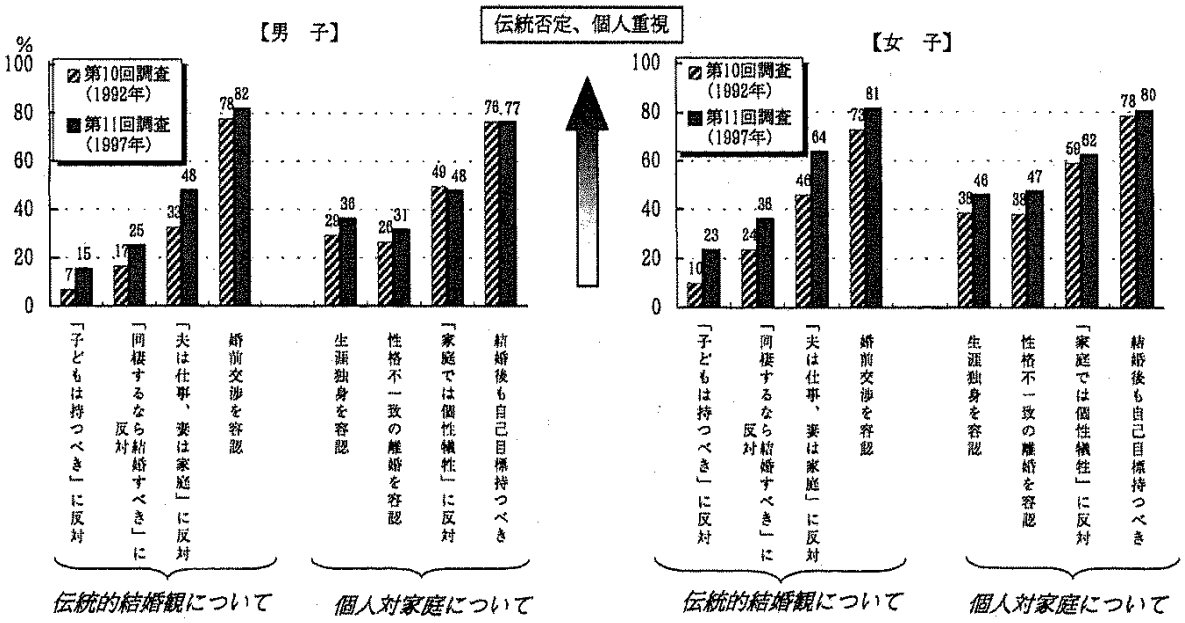
それでは男子で仕事や趣味が恋愛に優先するか，つまり仕事・趣味に重点を置いている者は異性交際が低調かと言うと必ずしもそうではなく，むしろ活発であることが確認されている。ところが女子では恋人がいる人は仕事・趣味の活動性は低い傾向が見られる[9]。女子では仕事・趣味と親密な交際は両立しにくいようである。

さて，未婚男女の結婚に対する態度を規定しているであろう男女関係・結婚・家族観は，最近の結婚動向の背後で大きく変化しているだろうか。図9にはわが国の代表的な家族規範についての未婚者の意識を5年前の調査と比較したものである。図では従来一般的であった考え方に否定的な意見を持つ者，より個人主義的な考えを持つ者のパーセンテージを示してあり，グラフが高いほど伝統否定，個人重視の度合いが強いことを示す。これによれば，男子の「家庭では個性を犠牲」に反対する者を除いて，男女ともすべての項目で伝統否定，個人重視の考え方が5年前より強まっていることがわかる。とりわけ「夫は仕事，妻は家庭」≒男女役割分業規範の否定，「同棲するなら結婚すべき」≒結婚制規範の否定，「(結婚したら）子どもを持つべき」≒子ども規範の否定の各傾向が著しく進展している。全体として結婚や家庭における伝統的規制に反対して，個人の生き方や自由を重視する考え方が強まっていると言える[10]。また，前回調査でも概して女子の方が男子に比べて伝統否定的傾向がやや強かったが，女子ではその後の進展のペースも速く，したがって男女の格差は広がっている。

Ⅵ まとめ

出生動向基本調査・独身者調査の結果を用いて，現代の若者たちの結婚事情を様々な角度から見てきた。簡単にまとめると，まず結婚意欲

図9　伝統否定，個人重視の回答者の割合（前回調査との比較）



注　対象は18～34歳の未婚男子3,982人，未婚女子3,612人。

や希望結婚年齢などの調査結果から，青年未婚者層の意識が結婚から離れつつあることがわかった。結婚自体を否定するような強いかたちではないが，結婚を先送りするなど，その実現から遠ざかっている。背景には結婚することの実際的メリット，ひいては必然性に関する確信が持てず，以前に比べ結婚に魅力を感じなくなっている若者の姿が浮かぶ。次に男女関係については，高まる性経験率とはうらはらに結婚につながるべき異性交際は未婚者のおよそ4割～半数で交際相手がいないなど，依然低調なまま推移している。意識面だけでなく，こうした状況も結婚にとって不利に働いている。

さらに女子の場合，結婚後の就業に対して意欲を持ち，仕事と家庭の両立を理想としながらも，子育て時期は家庭に留まること(「再就職コース」)を現実的選択と考えており，彼女らにとって結婚・出産・子育ては生き方を束縛するものとして負担感を与えている[11]。そのせいか未婚男女の希望する子ども数は着実に減っている。夫婦調査で判明した若い夫婦の出生ペースの低下などを考え合わせると，これまで安定していた夫婦の出生行動にも今後については陰りが見え隠れする。レジャーや交友に自由な生活スタイルを持ち，個人主義的価値観を強めている若者たちにとって，それらを束縛する従来型の結婚・子育ては，たしかに一方ならぬ負担であるに違いない。今回の調査を見る限り，若者たちをとりまく状況の中に，現在の少子化傾向を転換させるような要素は乏しいと言わざるを得ない[12]。

唯一の希望は，彼らの「理想」が比較的高いレベルに留まっていることである。90%ラインは下回ったものの，「いずれ結婚するつもり」の者が大多数であることに変わりはないし，子ども数についても未婚者の希望が実現すれば女子1人当たり平均子ども数は2.02となる（結婚を望まない者は子どもを持たないとして計算)。人口置換水準（2.08-1996年）にはわずかに及ばないものの，適正な水準といえる。今後の少子化の行方は，こうした希望を実現できる社会を造れるか，すなわち結婚や子育ての不利益や負担感を軽減し，逆に新たな魅力あるものにできるかどうかにかかっていると言えよう。

参考文献・脚注

1）厚生省大臣官房統計情報部「平成10年人口動態統計の年間推計」.

2）第11回出生動向基本調査・夫婦調査の結果．高橋他，「現代夫婦の子どもの生み方」『厚生の指標』第45巻第11号（1998年10月），P.3-12，または『平成9年日本人の結婚と出産－第11回出生動向基本調査－』（1998年12月25日，厚生統計協会）を参照.

3）少子化の背景について昨年の厚生白書では，日本は結婚や子育てに「夢」を持てない社会になっているのではないかという指摘がなされ，また内閣主宰の「少子化への対応を考える有識者会議」の提案（平成10年12月21日）では，日本的雇用慣行をはじめとする「働き方」や，男女の固定的役割分業，地域社会のあり方などの問題点を指摘しており，ともに少子化の要因を社会のあり方全般に求めている.

4）独身者調査は，全国の年齢18歳以上50歳未満の独身者を母集団とした標本調査であり，平成9年6月1日現在の事実について調べている．調査方法は配票自計－密封回収方式により，有効回収率は74.9%であった．詳細は，国立社会保障・人口問題研究所，「平成9年 独身青年層の結婚観と子ども観－第11回出生動向基本調査」，厚生統計協会（1999年1月）参照.

5）上記（注4）文献，第2章第1節参照.

6）この原因としては，独身男女が互いに望む年齢層および社会経済属性（学歴など）間の人口の構造的不均衡などが挙げられ，さらに見合結婚から恋愛結婚への転換に象徴される配偶者選択様式の変容（前掲書注2)が，「ふさわしい」結婚相手を得る上での困難さを助長している可能性が指摘されている.

7）夫婦調査各調査時点より過去5年間の結婚における夫妻の平均年齢差は，第8回（1982年）2.7年，第9回（1987年）2.9年，第10回（1992年）2.6年，第11回（1997年）2.3年.

8）夫婦調査各調査時点より過去5年間の結婚における恋愛結婚割合は，第8回（1982年）68.1%，第9回（1987年）74.1%，第10回（1992年）82.8%，第11回（1997年）87.3%.

9）「恋人がいる」「異性の友人がいる」「異性の交際相手はいない」の比較において，仕事・趣味の活動性が最も高いのは「異性の友人がいる」であり，「恋人がいる」「異性の交際相手はいない」の活動性はほぼ同程度であった．詳細は前掲書（注4）第11章参照.

10）同様の意識変化の進展が，結婚後の妻にも見られる．前掲報告（注2）参照.

11）未婚女子は結婚すると行動や生き方，交友関係，職業が束縛されると感じている．前掲書（注4）第2章2節参照.

12）現在第2次ベビーブーム世代が出産期に入っているので，そのことによる構造的な出生数増加は見込まれている.